

プロクロスのプラトン解釈法

一対話篇序と単一主題との関係に関する

『「アルキビアデス」篇註釈』18.15-20.1の解釈¹

瀧 章 次

1. はじめに

プロクロスのプラトン対話篇解釈には、イアンブリコスに由来する方法的前提がある。その根本は、対話篇と宇宙における存在者の階層構造に類比した構造があるとする考え方である。これによれば、宇宙における質料、形相、魂、知性に対応して、対話における登場人物や舞台設定等の劇的構成要素、普遍的理論活動の器となるさまざまな言論様式、普遍的理論活動を表わす論証、対話篇の単一主題、いわゆる「ねらい」(*skopos, prothesis*)、があり、さらに、宇宙における最高存在である神に対応して、対話篇の究極目的、善がある²。この類比理論の系として、単一主題が対話篇の中の論証のすべてを包摂するという前提がある³。また同じくその系として、各個対話篇の冒頭部、序 (*prooimion*) には、既に単一主題が具現しているとする前提がある⁴。

この解釈法に従えば、プラトンの対話篇を読むことは、理解の上向に伴って、読者であるわれわれが、神に似るべく人間に固有の善を完成する過程として考えられる。さらに、上記第一の系に従えば、対話篇の中に論証を特定し、その結論(群)を包摂する理論を考察することが解釈者の課題となる。また上記第二の系に従えば、対話篇の冒頭について、対話篇の全体の単一主題が既に読み取れるという前提で、隠された単一主題の解読が要請される。

本稿は、拙稿、2008年12月オーストラリア、ニューキャッスル大学での学会‘Socrates, Alcibiades, and the Divine Lover/Educator’論集投稿論文(受理 2009.12)‘Proclus’ Reading of Plato’s *Sokratikoi logoi*: Proclus’ observations on dialectic at *Alcibiades I*, 112d-114e and elsewhere’, 『城西国際大学紀要』第17巻第2号(2009年)53-62所収「プロクロスに見るプラトン対話篇単一主題探求型解釈法の歴史的位置づけ—トラスユロス(Thrasyllos)の解釈法の批判的継承について」、知泉書館発行、逸身喜一郎教授ご退職記念論集所収(2010年3月発行予定)「プロクロスのプラトン解釈法—『「アルキビアデス」篇註釈』における推論特定手続きの問題」に関わる。執筆順に関心を述べると、いずれもプロクロスのプラトン解釈法に関わるもので、英文論文では、プロクロスのソクラテスの対話を対話相手の完徳の過程としてとらえる読み方の霊魂論的な前提を、続くトラスユロス関係論文では、各個対話篇の単一主題(*skopos*)とトラスユロスのプラトン著作編纂の際に付された各個対話篇副題との実質的な関連性を、続く二編では、注釈の具体相を明らかにするために、『アルキビアデス I』注釈序の「推論からねらいへ」という解釈法と、本稿、「ねらいと対話篇序との一致」という解釈法を考究する。

¹ プロクロスの『アルキビアデス I』の注釈書は、A.-Ph. Segonds, *Proclus, Sur le premier Alcibiade de Platon*, 2 tms (Budé edition) 1985), 『パルメニデス』の注釈書は、C. Steel, *In Parmenidem (Procli In Platonis Parmenidem Commentaria*, Oxford, t. 1, 2007, t. 2, 2008) と G. Stallbaum, *Platonis Parmenides cum quattuor libris prolegomenorum et commentario perpetuo: accedunt Procli In Parmenidem Commentarii nunc emendatius editi*, Lipsiae, 1839 (reproduction: Frankfurt, 1976)を用いた。そのほかの注釈書は Teubner 版による。プロクロス作品の略称は Liddell & Scott & Jones’ *Greek-English Lexicon*, Oxford, 1996⁹による。

² *In Alc.* 10.4-16; L.G. Westerink, J. Trouillard et A.-Ph. Segonds, *Prolegomènes à la philosophie de Platon*, Paris, 2003, 17 (以下 *Prolegomena*)。 *Prolegomena* では、神に善が対応するが、プロクロスの記述では、善に神に似ることが対応する。

³ *In Alc. ibid.*; 14.23-25; 15.1-18.12; *In Parm.* 630; *In Cra.* 1, *In R.* 1.5.1ff.; *In Ti.* 1.1-4; *Prolegomena ibid.*, 21.

⁴ *In Ti.* 1.77.28-1.78.1: 1.204.24-26.

本稿では、この第二の系、すなわち、対話篇の単一主題は対話篇の冒頭に具現しているとする解釈前提について、このことに関わる有力テキストを取り上げて、その当該個所の解釈を試み、その含意を検討する。

扱うテキストは、プロクロスの『アルキビアデス』(以下 *Alc.*) に関する注釈書の(注釈書は以下 *In Alc.*)、注釈前書きに続く、注釈本文、*Alc.* 103a に関する注釈冒頭部 2 節、**Segonds** 校訂テキストによる 18.15-20.1 である⁵。

Alc. については、近代の批判的研究では、プラトンの真作であるか否か、未だ決定的とは言えない。従って、偽書とみる立場からみれば、当該箇所のプロクロスのプラトン解釈法は、偽書に基づいた判断と言えるわけであるが、しかし、歴史的見地からは、プロクロスは、古代の多くの読者同様、*Alc.* を真作であり最も重要なプラトン哲学の手引きと考えている。それゆえ、ここでも、歴史的な見地で、プロクロスがプラトン解釈をどのように考えていたかを明らかにする。また当該箇所は、プラトン対話篇一般について考えられることを、*Alc.* に適用することを論じている箇所であるから、プロクロスの観点に立って、プラトン一般に関する解釈法を論ずる上では、真作問題は本稿の議論には支障がない。

以下においては、まずテキストと私訳を提示し、次に重要な解釈問題について論じたいうえで、その解決となる整合的な読みを提案し、最後に私案の含意を検討する。

2. テキスト *In Alc.* 18.15-20.1

Τὰ προοίμια τῶν Πλατωνικῶν διαλόγων συνάδει πρὸς 18.15
τοὺς ὅλους αὐτῶν σκοποὺς, καὶ οὔτε δραματικῆς ἔνεκα
ψυχαγωγίας μεμηχάνηται τῷ Πλάτωνι (πόρρω γὰρ ἔστιν
ὁ τρόπος οὗτος τῆς συγγραφῆς τῆς τοῦ φιλοσόφου μεγα-
λοφροσύνης) οὔτε τῆς ἱστορίας στοχάζεται μόνης, ὥσπερ
τινὲς ὑπειλήφασιν· οὔτε γὰρ πιθανόν ἐστιν οὐθ' ὅλως 20
δυνατόν, ἅπαντα ἐξῆς ἀπὸ τῶν γεγονότων ἢ ῥηθέντων
λαμβάνεσθαι πρὸς τὴν μίαν / τῶν Πλατωνικῶν συγγραμ- 19.1
μάτων τελείωσιν· ἀλλ' ὥσπερ καὶ τοῖς ἡμετέροις δοκεῖ
καθηγεμόσι καὶ ἡμῖν ἐν ἄλλοις μετρίως ὑπέμνησται, τῆς
ὅλης τῶν διαλόγων ἐξήρηται καὶ ταῦτα προθέσεως, καὶ
τὰ μὲν ἐκ τῶν ὑποκειμένων πραγμάτων ἢ λόγων συναρμόζε- 5
ται πρὸς τὸν παρόντα σκοπὸν, τὰ δὲ τελειοῦται τῶν ἐλλει-
πόντων εἰς τὴν τῆς προκειμένης θεωρίας συμπλήρωσιν,
ὁμοῦ δὲ πάντα καθάπερ ἐν τελειῇ πρὸς τὴν ὅλην ἀνάγεται
τῶν ζητουμένων τελείωσιν. τοῦτο δὴ οὖν μοι δοκεῖ καὶ ἐν

⁵ A.-Ph. Segonds, *op.cit.*

τούτω τῷ διαλόγῳ προτείνειν ἡμῖν ὁ Πλάτων τὸ δόγμα,	10
καὶ καλῶς ἐπιδεικνύει δι' αὐτῆς τῆς πρωτίστης ἐπιβολῆς τῶν λόγων τὸν σύμπαντα τοῦ <συγ>γράμματος σκοπὸν.	
Πρόκειται μὲν γὰρ αὐτῷ, καθάπερ εἶπομεν, τὴν φύσιν ἡμῶν ἐκφῆσαι καὶ τὴν οὐσίαν ὅλην καθ' ἣν ἕκαστος ἀφώρισται	
τοῖς ἐπιστημονικοῖς καὶ ἀνελέγκτοις τῆς θεωρίας λόγοις	15
περιλαβεῖν καὶ τοῦτο ἐκεῖνο τὸ Δελφικὸν παράγγελμα τὸ γ ν ὦ θ ι σ α υ τ ὄ ν, ὅ τι ποτέ ἐστίν, ἀποκαλύπτει διὰ τῶν ἀποδεικτικῶν μεθόδων· αὐτὸ δὲ τὸ προοίμιον ἐπιστρέφει μὲν εἰς ἑαυτὸν τὸν νέον καὶ καθίστησιν ἐξεταστὴν τῶν ἐν αὐτῷ προϋποκειμένων διανοημάτων, ἀνάγει δὲ αὐτὸν ὁμοῦ	20
τῇ πρὸς ἑαυτὸν ἐπιστροφῇ καὶ εἰς τὴν τῆς Σωκρατικῆς ἐπιστήμης περιωπῆν. τὸ γὰρ ἐξετάζειν τὴν αἰτίαν δι' ἣν ὁ Σωκράτης μόνος τῶν ἑραστῶν οὐκ ἀπέληξε τοῦ ἔρωτος, ἀλλὰ καὶ ἤρξατο πρὸ τῶν ἄλλων καὶ πεπαυμένων ἐκείνων οὐκ ἀπαλλάττεται, θεατὴν αὐτὸν ἀποφαίνει τῆς ὅλης τοῦ	25
Σωκράτους / ζωῆς.	20.1

3. 翻訳

注 1 : 18.15-19.9 までの、長い文については、後にその構文分析等で議論する際の便宜上、否定辞、小辞を除いた部分の主節(Matrix Clause)について、本文の順に番号を付し、丸括弧で「(MC1)」のように訳の終わりに挿入する。

注 2 : 原文にない訳者の補いは、角括弧にいれて示してある。

注 3 : 「/」は、例えば「A/B」で、「A または B、あるいは、A かつ B」の意味で、多義的に用いられていると判断したところに使う。

「プラトン諸対話篇の序は、各対話篇のねらい全体と相互に合致している⁶ (MC1)。つまり⁷、対話篇の序は、プラトンによって、演劇において志向される聴衆の内に生ずる感興のために⁸、仕組まれている (MC2) ののではない。というのもそのような作品構成のしかたは、この哲学者の気高さととはほど遠いからである (MC3)。また、ある人々がそう判断しているちょうどその通りに [対話篇の序は] 単に歴史的叙述をねらいとしている (MC4) のでもない。何となれば、[誰かある作者が] 起きたこと

⁶ Cf. *In Alc.* 168.11-12.

⁷ 等位接続詞καὶを先行する節の内容を説明補足する用法ととる。

⁸ R. Pfeiffer, *History of Classical Scholarship*, Oxford, 1966, 166-167.

や、語られたことからそのすべてを、順番に取り出せば、プラトンの著作に唯一の完成の基準が満たされるという考えは、もっともらしいこと (MC5) でもなく、また、可能なこと (MC6) でも全くなく、そういうこと (MC5、MC6) ではなく、われわれの先達たちもそう考え⁹、また、われわれも、別の著作で、注釈しているちょうどその通りに、対話篇の序でさえ、対話篇のねらいから由来して、降りてきている¹⁰ものである (MC7) からである。つまり¹¹、対話篇の序のうち、あるものは、その対話篇のねらいと、[序に描かれている] 対話の根本にある普遍的な事があるいは具体的な言葉 [の負っている働き] によって¹²、適合している (MC8) 一方、また、ある序は、その対話篇で [プラトンが] 提示している考察の意味を充実させるには、そこに書かれていないことがらによって¹³完全なものとなるのである (MC9) が、しかし、いずれの場合 (MC 8、MC 9) にせよ、対話篇の序は、みなすべて、秘儀における場合と全く同じ仕方¹⁴で、[われわれが/プラトンが] 探求している事柄の全き成就という高みへと導かれているのである (MC10)。まさにこの考えを、実際、この対話篇においても、プラトンは、われわれに提示しており、また、プラトンは、一等最初の 発語そのもの/ロゴスの投射¹⁵そのもの を通じて、この作品のねらいの全体を見事に顕示していると、私には思われる。

何となれば、一方で、プラトンは、先にわれわれが論じたちょうどその通りに、われわれの本性を明らかに示すこと、すなわち、われわれのおのおのが他から分別されていることのその基準となる本質全体を、[プラトンの] 考察が生み出すものであって、認識に基づき、かつ、論駁に堪える性質を備えたものであるところの論証によって、包摂すること、また言い換えると、かのデルフォイの箴言「汝自身の」一体何であるかを「知れ」の真意を、[プラトンの] 論証による探求方法¹⁶を通じて、[プラトンが] 晒すことを、ねらいとして提示しているからである¹⁷。他方で、また、序そのものは、若者アルキピアデスを自分自身へと向きかえらせ、自分自身のうちに生まれる前からそなわっている知性に発する考えを吟味するものとならしめている一方、また、同時に、アルキピアデスを自分自身に向きを変えさせることによって、ソクラテス的な知にもまなざしを向けるという高みに導くのである。何となれば、ソクラテスがただ一人、愛童者たちの中で、愛することを止めることなく、ほかの愛童者たちに先立って愛することを始め、かれらが愛することを止めたときにも、離れることがないままでいるのはなぜなのか、その理由を具に分け入ってみることによって、この若者は、ソクラテスの生の全体を観望する人として立ち現れるからである。」

⁹ Syrianus を指す婉曲表現 (J. Dillon, *Iamblichus Chalcidensis In Platonis Dialogos Commentariorum Fragmenta*, Leiden, 1973, 231; *In Ti.* 1.77.26 et passim)。

¹⁰ 起源、原因との関係を表わす動詞である (e.g. *Theol. Plat.* 3.32.20)。

¹¹ 等位接続詞 *καί* を先行する節の内容を説明補足する用法ととる。

¹² *ἐκ*+属格は、起源、構成要素ではなく、原因ととる。*πράγματα ἢ λόγοι*については、プロクロスに語の連結として平行例がない。プロクロスの注釈本文の考察に交代的に現われる、対話を「普遍化する」ことによって現われる普遍的な事柄 (*πράγματα*) と、それとの関係においてある言葉 (*λόγοι*) と考える。

¹³ 完成の意味と充実の意味の近接から、完成するのに必要なものを表わす属格か原因を表わす属格 (cf. *In Ti.* 1.297.4 *πάν γὰρ τὸ τελειούμενον ἐκ τοῦ κατ' ἐνέργειαν ὄντος τελείουται*) ととる

¹⁴ Cf. *In Alc.* 142.4-5.

¹⁵ *ἐπιβολή* はエピキュロス派の述語であるが、プロクロスにおいては、「魂がロゴス/形相を投射する (*προβάλλειν*)」とする 靈魂の働きの描写において、名詞 *προβολή* と代替可能な述語として使われてもいる (*In Parm.* 864.23-865.1; 873.31-874.6; 876.20-30; 877.13-16; 932.13-17)。

¹⁶ *μεθιέναι* という動詞における探究活動を指す名詞である。Cf. *In Alc.* 201.10; 213.3.

¹⁷ Cf. *In Alc.* 277.11-16.

4. 解釈問題の原因とその解決のための可能な手続き

解釈上の紛糾の原因は、とにもかくにもプロクロスが等位接続によって、数珠つなぎにしたことにある。そして、いくつかの指示対象が不明瞭なことにある。こういう条件の下では、下手に接続の論理を明確化しよう、さらに、全体を一つの解釈に限定しよう、そう企てたとしても、単なる解釈のための解釈、無駄に迷路に迷い込むことになりやすい。

そこでこの解釈問題について、まず明らかな点を確認し、プロクロスの議論の大枠から外れないようにしたい。まず、対話篇の序は単一主題と一致しているという一般論があり、*Alc.*にもこの一般論が当て嵌まると主張している事、具体的には、*Alc.*には自己自身の本質という単一主題があり、書き出しの頭から、その自己自身の本質が何であるか書いてあると主張している事、この事には、紛れがない。またこの主張に従って、プロクロスが、*In Alc.*現存 339 ページ中、152 ページにもわたってこの主張を具体的に展開している事も紛れがない。

また問題箇所においても、最初の 4 つの主節 MC1-4 については、プロクロスが具体的にどんな作品を念頭においていたかは確定できないにせよ、文学作品の序の働きに関する、ジャンルの違いを述べている事、また、プラトンによる対話篇というジャンルでは、序の働きが、他の劇作（恐らく悲劇、喜劇）や歴史書とは異なっている事を述べている事、これらも明らかである。

さらに、18.15 - 19.9 の個所は、先行の訳者の訳を参照しても分るように（注 11 参照）、冒頭で、対話篇の序は単一主題と一致する事を述べ、また、19.2 の *ἀλλά* 以下で、対話篇に書かれているすべてが単一主題に帰一するという事を述べている。いずれも、単一主題の存在を前提とする以上、ある意味自明な、一般論を述べている、この事も、細部の論理関係は措いて、問題ない。そして、この一般論を述べた個所は、*Alc.*序にこの一般論を適用した具体的記述と対応するよう書かれているわけであるから、以下論ずるよう一般論の細部に曖昧な箇所があるにしても、*Alc.*序に関する具体論から、趣意は明らかと言えよう。

以上のような大枠が確認できるとすれば、この箇所での解釈の課題は、*Alc.*序の具体論の記述的特性と整合性を保つ範囲で、一般論の細部の意味を狭めることである。一般論の記述内容において、論理関係を表す語が形式的に並列であり、かつ、部分命題の内容がその指示対象の曖昧さによって全体として曖昧であることは、テキストそのものの所与の条件であるから、その構造的曖昧さを狭めるには、所与としての構造的対応を参照軸として選択することが確実な手続きであろう。

5. 解釈問題解決の手掛かり

*Alc.*序の具体論における、一般論の記述に対する遡及的な手掛かりは、まず、19.13 の *Alc.*序の具体論冒頭、*πρόκειται* 「提示されている」にある。これは、*προτίθημι* 「提示する」の意味上の受動形として、その抽象名詞である 19.4 の *πρόθεσις* 「提示」と関わる。この *πρόθεσις* とは、単一主題を表す「ねらい」*σκοπός* と近接文脈で置換可能な言葉としてプロクロスがしばしば使用する術語である。も

ちろん 19.13 の προκεῖται 「提示されている」の意味上の主語 $\alpha\upsilon\tau\omega$ が指すのは、先行する 19.9-12 の文の主語、すなわち、プラトンである。

この手掛かりが何を意味しようか。「ねらい」あるいは単一主題というのは、解釈上の術語であって、誰が何をねらうという具体的事項を前提として要求するものではなく、解釈者の解釈の産出物を指しているに過ぎないと、せいぜい、その結果として、著者に責任を帰しているに留まると、そう人は考えるかもしれない。確かに、注釈本文において、注釈の叙述が形式化していく流れがあったのは事実であろう。しかし、19.13 以下 *Alc.* 序の具体論の記述の意味論が示していることは、プラトンが、対話篇を書くことにおいて、同時に、主題の提示として、理論的活動をしていることを示している。しかも、これは、19.18 以下、関連詞... $\mu\acute{\epsilon}\nu$... $\delta\acute{\epsilon}$ の働きで、プラトンを含まぬ、*Alc.* 序の含意を述べる解釈文と並列されている。これは、プラトン対話篇をプラトン自身の考察活動そのままと考えることに慣れている解釈者にとっては陳腐なことであるかもしれないが、それでも、プロクロス自身の解釈法的具体相を明らかにする上では、重要である。問答の論証的部分にプラトンの考察活動を見る解釈は常識的であるが、文学的技巧の評価に、通常は、傾く書き出しの部分にまで、主題に関わるプラトンの考察活動を探ろうとするのは行き過ぎとも思われるところであろう。それ故に、確かに、こうしたプロクロス自身の解釈文の意味論の相互関係を詳細に見てみるまでは、一例をもって一般化するのは危険であるけれども、曖昧な文意の先行一般論に、具体例における解釈文の意味レベルに対応させて、一つの形を与える試みには意義が存しよう。

6. 解釈上の具体的個別問題とその解決策

それでは、後続する具体論の特性から先行の一般論を見るととき解釈上の問題はどこまで解決することができるであろうか。以下において、問題となる箇所解釈上の争点を、先行の3人の訳者、Coulter、O'Neill、Segonds を参考にしながら示す¹⁸。

18.15-19.9 の構文について、下記のような構造として表わせる。否定辞または小辞の支配領域が明確なものについては、丸括弧をつける。

MC1+ $\kappa\alpha\iota$ +($\sigma\upsilon\tau\epsilon$ (MC2) + $\gamma\acute{\alpha}\rho$ (MC3)) + $\sigma\upsilon\tau\epsilon$ MC4 + $\gamma\acute{\alpha}\rho$ ($\sigma\upsilon\tau\epsilon$ (MC5)
 $\sigma\upsilon\tau\epsilon$ (MC6)) + $\acute{\alpha}\lambda\lambda\acute{\alpha}$ (MC7) + $\kappa\alpha\iota$ + ($\mu\acute{\epsilon}\nu$ (MC8) + $\delta\acute{\epsilon}$ (MC9)) + $\delta\mu\omicron\upsilon$ $\delta\acute{\epsilon}$ (MC10)

英語でおよその対応をつければ、下記ようになる。

MC1 + AND + NEITHER (MC2) + FOR (MC3) + NOR (MC4) +
FOR (NEITHER (MC5) NOR (MC6)) + BUT (MC7) +
AND (ON THE ONE HAND (MC8), ON THE OTHER (MC9))
+ BUT, ALL THE SAME, (MC10)

¹⁸ W. O'Neill, *Proclus: Alcibiades I: A Translation and Commentary*, 2nd ed., the Hague, 1971, 11-12; J.A. Coulter, *The Literary Microcosm: Theories of Interpretation of the Later Neoplatonists*, Leiden, 1976, 84-85; A.-Ph. Segonds, *op.cit.*, t. 1, 15. なお、Thomas Taylor は、18.20-19.2 $\sigma\upsilon\tau\epsilon$ $\gamma\acute{\alpha}\rho$... $\tau\epsilon\lambda\acute{\epsilon}\iota\omega\sigma\iota\nu$ を訳さず、また、19.4 $\kappa\alpha\iota$ $\tau\alpha\upsilon\tau\alpha$ の問題も避けている (T. Taylor and F. Sydenham, *Know Thyself: Plato's First Alcibiades and Commentary*, Somerset, 2002 (orig. 1804), 68).

大きな問題としては、相互に関連した以下の3つの問題がある。

(1) MC1 と MC7 との内容上の関係は何か。

(2) MC8-10 の内容は何か。

(3) ἀλλάの論理は何か。

この3つの問題に、さらに具体的に絡むのは、(4) 19.1 のλαμβάνεσθαι「取られる」、「選択される」、の意味上の主語は、解釈者であるのかプラトンであるのかそれともほかの何かか、(5) 19.4 の καὶ ταῦτα「それも」の指示代名詞の指示対象は、18.15 のτὰ προόμια、対話篇の序か、18.21 の τῶν γεγονότων καὶ ῥηθέντων、起きたり語られたりしたことか、(6) 19.5 のτὰ μὲν、19.6 のτὰ δέ、19.8 のπάνταが表わすのは、対話篇の序か、起きたり語られたりしたことか、以上の指示対象不明瞭の問題である。

まず、(1)(2)(3)(5)(6)に関わる問題であるが、MC7 について、問題(5)の指示語の問題は、「対話篇の序」ととっても、「起きたり語られたりしたこと」ととっても、「それもまた」という主語において、含意としては、いずれも対話篇に書かれていることのすべてを意味することになる。従って、MC7 の意味は、対話篇に書かれていることのすべては、単一主題の全体に依存している (ἐξήρηται) ということになる。合成語のもとになっているἀρτῶνという動詞の受動形の構文では、空間的な意味をもたず事柄の依存関係を表しているが、プロクロスの依拠する存在階層論上の高下の関係を意識して「降りてきている」と訳してある。そこで、(1)の問題として、MC1 の「単一主題と相互に合致する」と MC7 の「単一主題から降りてきている」とで、比較される単一主題と序との二項の派生関係の序列を述べる点で後者は異なるが、相応性がある点では、両者に差異は認められないであろう。従って、(3) ἀλλάの論理の問題は残るけれども、MC1 が、当該パラグラフの主題として理由付けられるべきことがらであったとすれば、MC1 は MC7 によって、相応性に関し包摂されている点で、理由が与えられたという解釈は成り立つ。

そうだとすると、(2)の問題として、MC8-10 の全体が、MC7 の理由付けに、文法上並列の関係で与えられるとすると、パラグラフの完結性から複数主題の提示は好まれず、自ずと、MC8-10 は、複数主題を盛り込んだのではないと好意的に解釈する限り、MC7 の含意、対話篇に書かれているすべては、単一主題に依存していること、これを具体的に展開しているとする解釈が選好される。そこで問題(6)としては、MC8 と MC9 との間の内容上の問題として、どのような仕方で単一主題と対話篇の部分が一致するかその仕方を概括的に二通りに対照させた分類と理解し、用語上の対比として、MC8 のὑποκειμένων「材料として当該箇所書かれてある」場合と MC9 のἐλλειπόντων「当該箇所に欠けている」場合との対比に着目して、単一主題との一致が補足なくうまく行く場合と、補足を必要としている場合とを示した上で、眼目として、MC10 でいずれにせよどんな部分も、単一主題に辿りつくようになっていると述べる事を以って締め括られていると解釈することが有力となる。

先行の訳者も、MC8-10 で対話篇序のあり方が一貫して問題となっているとは、とっていない。MC8 のὑποκειμένων、πραγμάτων καὶ λόγωνも、先行するγεγονότων καὶ ῥηθέντωνと同じように解釈し、また、MC9 のπροκειμένης、θεωρίαςの含意にも翻訳者としては、深入りせず、MC10 の

πρὸς τὴν ὅλην ζητούμενων τελείωσινにも余計な解釈は施していない。

しかし、もし MC8-10 が、対話篇の部分を併せた全体の話であるとする、*In Alc.*序文直後の、注釈本文冒頭の本箇所で、なぜ、*In Alc.*序文における対話篇一般の解釈法、推論を特定して、推論の結論から単一主題を導くという解釈法（冒頭に述べた類比理論の系の第一）の痕跡がなくなってしまうのか説明がつかなくなる。従って、MC8-10 では、対話篇の序に関する記述が書かれているとすべきであろう。

また、MC8-10 は、先行する *In Alc.*序文で論じられた、対話篇序以外の部分における、推論と単一主題との関係を前提にしていると考えれば、対話篇序の長大な注釈に先立つ、対話篇序一般論の一部であり、かつ、直後の *Alc.*序の総括的記述を包摂する記述であると考えられるべきであろう。

もちろん翻訳者たちも、θεωρίας、ζητούμενων、τελείωσινが何らかのプロクロス流の負荷を意義として負っていることは認めた上で、その書かれていない行為主体を特定することは翻訳の埒外と賢明に考えていると想像する。しかし、続く *Alc.*序の総括的記述を見れば、前節で見たとおり、これらの言葉が前提とする活動の主体がプラトンである可能性、そして、プロクロスの信ずるところ、読者自身の思考活動とプラトンの思考活動とが一致する局面での普遍的な「哲学」を想定している可能性を否定できないであろう。

また、ὑποκειμένωνも、それに形容されるπράγματαとλόγοιとも、確かに、対話篇の質料としての登場人物に関わることとして (*In Alc.* 10.7-8; cf. *Theol. Plat.* 5.88.5)、訳者たちとともに、単に、与えられた対話篇に書いてある登場人物のふるまいや言行と解すべきかもしれない。しかし、*In Alc.*序の後続する注釈本文との関係を考えて解釈するならば、対話の舞台設定や登場人物の意向を捨象し、読者一般に関わる普遍化された事柄に対する考察を行い、そのもとに、個々の対話者の言葉をその普遍的事態に関わる意味において考察するプロクロス注釈本文一般の展開法をも比較考量すべきであろう (cf. *In Alc.* 21.4, 22.12-13)。もしそうすべきであるならば、対話者相互の相互作用下にある乱雑な様相の基にある (ὑποκειμένων; cf. *In Alc.* 322.1-7) 普遍的な事柄(πράγματα)と、それとの関係にある対話の言葉と、あるいは、ひょっとすれば、当の普遍的な事柄に一致するロゴス(λόγοι)とまで、解釈する事にも理由がない訳ではない—もちろん、本格的には、アリストテレス用語を使用する戦略にまで論及すべき事柄ではあるが。

以上のように MC8-10 を、後続する *Alc.*序の総括記述の意味論、並びにその具体的展開としての *In Alc.*序注釈本文の意味論から解釈することが可能とすれば、では、MC7 におけるκαίによる添加の論理は、何であるのか。まず、MC7 の指示対象を、O'Neill のように、18.21 の「起きたり語られたりしたこと」と取ることは、MC7 が、MC1 の部分的繰り返しでは冗長となることを避ける意味で、理解できる。しかし、(イ) 先行する *In Alc.*序と、(ロ) 後続する、*Alc.*序と単一主題との関係の総括記述とを考えると、話題が、対話篇の序から離れることは避けるべきであろう。とすれば、対話篇序を主題とする MC7 の読みの可能性を探らなければならない。以下この方向で、(3) ἀλλὰの論理の問題と結び付けて考察する。

MC1-7 の論理構造に関しては、Coulter、Segonds のように、οὔτε (MC2) + γάρ (MC3)に対応させ

て、οὐτε MC4 + (γάρ (οὐτε (MC5) οὐτε (MC6))と区切るか、O'Neill の英訳の punctuation の一つの読みとり方から可能な解釈として、... οὐ ... ἀλλά ... の対比構造を見て、γάρ ((οὐτε (MC5) οὐτε (MC6)) + ἀλλά (MC7)) と取るかが分かれ目である。

Coulter、Segonds の解釈の利点は、①「起きたことや語られたこと」が歴史記述と関わる表現である事、②「歴史」という言葉と近接文脈で使用される例を挙げられる事 (*In R.* 1.14.22-23, 2.113.23; cf. *Polyb.* 20.10.13)、③構文のバランスとして、他の劇作における序の機能とプラトン対話篇のそれとの違いについて、理由を挿入したのに対応して、歴史書の序との違いについても、理由を挿入すると考えられる事、以上である。

欠点は、MC2、MC4 との関係から、λαμβάνεσθαι の意味上の主語を考えるとプラトンととることになり、そうすると、πρὸς τὴν μίαν τῶν Πλατωνικῶν συγγραμμάτων τελείωσιν 「プラトン作品の唯一の完成」「のために／との関係で」という句との間で、なぜ、主語「プラトン」を表現上省略しながら「プラトンの」と形容詞で間接的に示すのか、主語提示上の難が残る。

これに対する解釈の代替案として、先ず考えられるのは、主語を「解釈者」と取ることである。それは、O'Neill の punctuation が残した構文の可能性である。また、動詞λαμβάνω の主語を解釈者とする用例からも考えられる可能性である (cf. *In Alc.* 14.21, 56.5, 139.19-20, 228.9, 339.13-14)。

しかし、この MC5-6 の否定に伴う接続の小辞γάρの論理関係として、MC 1 または MC 4 の理由として読もうとするとき、MC 1 –MC4 までの、著者プラトンにとっての対話篇序の意義に関する記述と合致しない。

そこで、MC5-6 と MC7 との間の... οὐ ... ἀλλά ... の構造を見て、ἀλλά以下 MC7 に、小辞γάρの理由付けの中心があるように読む可能性が残る。確かに、対話篇序の価値を歴史的な叙述と考え低く見る例はある (*In Ti.* 1.204.16-18)¹⁹。しかし、この場合も、作品全体の中で対話篇序の意義を評価する文 MC7 に対する対照として、MC5-6 の否定を、歴史的叙述として対話篇序を低く評価する内容として読む可能性は、MC5-6 が解釈上の網羅性を述べる文である限り、文脈上の含みとして拡大解釈を試みても、見出し難い。

以上 MC5-6 における動詞λαμβάνεσθαι の主語を「作者プラトン」と取ることも「解釈者」と取ることも難点が残る。この難点を解決する策としては、先の Coulter、Segonds の解釈の利点を生かす意味で、隠された主語を、プラトンではなく、無限定のまま、一般的に作家ととることが残されていると思われる。MC5-6 の否定を、誰であれ書き手が、起きたり語られたりした既に存立している事実をもとに、逐一事のあらましを並べ立てても、「プラトンの作品に固有の完成」を与えることにならない、あるいは、その基準を満たすことにはならない、という考えを述べるものと解釈することである。端的に言えば、歴史的記述の方法に従ってもプラトンの対話篇にはならないとの作品成立の根拠に関わる論である。

この理解に従うと、MC7 で、ἀλλάと接続する時、その関係を、直前の MC5、MC6 の否定との対比関係、すなわち、οὐτε ... οὐτε ... ἀλλά ... と取るか、あるいは、MC2、MC4 の否定的な言い方に対

¹⁹ J. Dillon, *op.cit.*, 294-295.

して、プラトン対話篇の序を肯定的にとらえなおす表現と取るかいずれかとなる。

前者の対比関係を読み取る考え方は、一読、難である。そうすると、後者と取り、MC7の指示語の指示対象を「対話篇の序」と取ることになる。その場合、MC1の後、等位接続詞 $\kappa\alpha\iota$ でMC2、MC4と説明したのちに、「対話篇の序もまた単一主題から降りてきている」というとき、なぜ「もまた」と付加することになるのか。それは、先行する *In Alc.* 序の部分で「諸推論の結論が単一主題に一致する」ことが十分述べられたからだとして、すなわち諸推論の結論に加えて序もまたの謂いだとして、説明することは不可能ではないかもしれない。しかし何に何を付加しているか、指示語ともども、文脈上明示せずとも明らかとはいえない。また、MC1の相互の相応性以上に、確かに相応性の理由となる、派生関係の序列が加わっているのは確かである。しかし、近接の劇作、歴史というジャンルごとの作品冒頭部の目的あるいは機能に関する論との関係で、この $\kappa\alpha\iota$ による付加を説明する力に欠けていると思われる。そうかと言って、MC7の指示語を、「起きたことや語られたりしたこと」とすることは、対話篇における記述・描写の元が歴史記述とは異なるとの論として、MC5・6との対比は描けるが、先に論じたようにMC8・10が、対話篇序という全体の主題から逸れる点でやはり問題であろう。

それでは、前者によって、近接の歴史作品冒頭部機能論との対比を示す読み方は可能であろうか。MC5・6の不定詞句の内容が、歴史作家の立場に立った作品構成法を述べているのに対し、MC7を、プラトンによる対話篇の作品構成法を述べているという点で対比を見ることは可能であろう。また、作品冒頭部に関する論として、歴史作家の場合には、材料として所与としての事実、すなわち「既に起きたり語られたりした事」があり、そこから、因果関係、叙述上の漸層法はあるものの、事実としては「順々に」、それ故、すべて並列、等価な事実命題として、それ故、序もまた、単なる事実並列の一齣としてある、こうした事柄が含意されていると見ることはできよう。それに対して、プラトンの場合には、既に起きたり語られたりしたことという事実を出発点にしていない。すべての対話篇の記述は、プラトン自身の哲学的考察の目的から書かれている。従って、歴史記述からすれば卑小とも思われる端緒、記述上の冒頭部も、この目的から書かれている。こうした対比を見ることは可能であろう。そうであれば、MC8・10は、MC7の新しい論点「派生関係」に関する具体的展開と見ることも可能になる。そしてその結果、プラトン対話篇序を主題とするパラグラフの完結性も保たれることになる。

5. プロクロスのパラトン解釈法に関する上記解決策の含意

以上の解釈の試みは、プロクロスの曖昧な構文、曖昧な表現ゆえに、翻訳者が踏み込まずにおいた部分について、*Alc.* 序に関する具体的記述における解釈文の意味論に基づく試みである。これによって、先ず、プロクロスにとっては、対話篇とは、その冒頭から、普遍的にプラトンが考察していることそのものを表わしているばかりでなく、恐らく、普遍的考察に必要で、実際の対話描写には書いていないことを満たしながら、プラトンが考察していることをも意味していることが察せられる。

また、確かに対話篇の単一主題ということを考える時、その名詞表現から、トラスユロスの副題同様、名詞表現や、結論的な単一命題を想定しがちなのであるが、また、プロクロスもそうした議論を

行わないわけではないが、動詞的な側面、すなわち、対話篇の対話劇の進行において、プラトン自身の、読者に向けられた、直接的な、そして、普遍的な事柄に関する、考察が展開しているというプロクロス（聴講者、読者と共有している）意識が明らかになっている。

さらに、本稿における解決策が示唆することは、プラトン対話篇においては、そもそも歴史家の如く記述・描写以前に対象世界が事実として存立していることはないというプロクロスの認識である。このことは、なぜプロクロスが、われわれの目からすると、よく言えば、対話篇の対話の記述を「昇華した」ものとして、悪く言えば、対話者相互の対話という所与を無視したものとして、独自の理論的考察を一プロクロスの言葉で言えば *πρῶγμα* 「事柄」に関する考察、真意としては、真実態というべき普遍的な事柄に関する考察を一注釈本文の注釈において重要視するのか、そしてまた、そのことと関連して、これに続く準位の、*λέξις* 「言葉」に関する考察において、しばしば、難読箇所解明のための、いわゆる語注を施すのではなくて、*πρῶγμα* 「事柄」あるいは、単一主題との関係で記述を施すことに留めるのか、こうした、いわゆるテキスト注釈にわれわれが期待することとは異なる注釈記述が展開されることに関する疑問に対して一つの答えを与えてくれる。通常、劇作内部の「所与」としての対話を、これもまた、厳密に言えば、解釈者がプラトンの書いた言葉を通じてプラトンが含意していると解釈する、解釈上の構築物であるけれども、それを解明することから、プラトンの対話篇を理解するという方法論とは異なる解釈法をプロクロスが選択している可能性を示しているということである。従って、対話篇の対話を底堅い所与としてプラトン理解の出発点と考える解釈法を判断基準として一これを安易にシュライエルマッヘル以来の伝統と呼ぶことは、論争のためにシュライエルマッヘルの立場を単純化してきた人々に与することになるゆえに避けるけれども²⁰一プロクロスを評価することは不当なプロクロス理解であることを示唆している。

²⁰ P.M. Steiner, 'Zur Kontroverse um Schleiermachers Platon' in F.D.E. Schleiermacher, *Über die Philosophie Platons*, hrsg. von P.M. Steiner, Hamburg, 1996, xxiii-xliv.

Proclus' Method of Interpreting Plato:
an interpretation of the passage on the relation between
a dialogue's preamble and single aim at *In Alcibiadem*,
18.15-20.1

Akitsugu Taki

Abstract

Proclus' *In Alcibiadem*, 18.15-20.1 is good theoretical evidence on his interpretative method of reading a single aim, in the preamble, of Plato's dialogue, which comes from Iamblichus' theory of the analogy in the scale of entities between the universe and Plato's dialogue. However, as previous scholarly translations show, the passage is hard to interpret because at 18.15-19.9, whereas the continuation of paratactic structures raises logical ambiguities, the demonstratives raise referential ambiguities. I propose a solution of the ambiguities by interpreting the part 18.15-19.9 in reference both to the subsequent passage at 19.13-20.1 where the previous general theory at 18.15-19.9 is applied to *the Alcibiades I* and to the preceding passage in *In Alcibiadem, Introduction* on the method of subsuming the arguments' conclusions in a dialogue under a single aim. My solution suggests on Proclus' interpretative method of Plato that by the technical term 'the aim of a dialogue' Proclus means not merely a subtitle of the dialogue but Plato's theoretical enquiry going on with the drama in a dialogue and that Plato's writing of a dialogue is based not on historical facts, as in historians' description, but on the expressions to be subsumed under the dialogue's aim, that is, Plato's theoretical enquiry. Therefore, Proclus would not agree with most modern readers' presupposition that the drama or conversational interactions given in a dialogue is the reliable fundamental material for interpreting Plato.